

謙虚に、感謝して

● 大自然の権威

関東地方を直撃した台風十五号は、千葉県を中心に「大規模停電」・「断水」などのインフラ遮断で甚大な被害をもたらしました。自然災害大国の日本では、いつ不自由な避難所生活を余儀なくされるか分かりません。思えば平成七(1995)年一月十七日、早朝五時四十六分。「マグニチュード7.3」と言われる今まで経験したことも無い凄まじい大地震が発生しました。犠牲者は実に六千四百三十四人に達したと言われています。当時、東洋最大の港であった近代都市での災害として日本国内のみならず世界中に衝撃を与えました。被害規模は戦後最悪と呼ばれた「阪神・淡路大震災」。続いて(想定外)と呼ばれた平成二十三(2011)年三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震「東日本大震災」。太平洋戦争(第二次世界大戦)後に発生した自然災害全体としても最悪な被害状況となりました。その後日本でも、全国各地で自然災害の脅威に晒されることとなります。紀伊半島で台風の被害があり、各地で大洪水があり、御嶽山の噴火もあり、熊本の大地震が、そして先月

の台風十五号・十七号の猛威。そんな国が、私達の国「日本」であり、我々はその様な自然大国と呼ばれる国土に暮らしているのです。

「ボランティア」という言葉も、この頃からよく耳にするようになりました。それまでは「ボランティア」を趣味とするか、党派的意味合いを帯びていたと思います。ある意味で、特別な市民が行うものというイメージが強くなりましたが、一九九五(平成7)年一月十七日に発生した「阪神・淡路大震災」をきっかけに、それまで主としてボランティアに携わってきた人々とは異なる、多くの市民が「災害ボランティア」として参加するようになりました。大同団結、日本は一つ!「がんばれニッポン」という合言葉の元、皆が心を寄せ合い、支え合いました。この「東日本大震災」以来、平成二十三年を「ボランティア元年」と呼ばれるようになります。

● 自らを生きる拠り所として

私達は大きな天変地異を経験すると、それまで何の疑いもなく生きてきた人生観が、根底から揺さぶられます。自然の権威は、人間が作り出した文明という名の快適な生活を、一瞬にして破壊してしまいます。大自然の前に「人間の作る文明社会とは、まるで映画のセットのようにもろいものだな」と痛感させられます。今更ながら、

自然は人間の尺度や予想など全く意に介さない、無情なものであることを痛感します。一方では、「生かされている命」を実感するものです。

お釈迦さま最後の説法は、『自帰依自灯明(じきえじとうみやう)』:『自らを灯明とし、自らをよりどころとせよ』という教えでした。スペインの哲学者オルテガ氏は「私は、私と私の環境である。そしてもし、この環境を救わないなら、私も救えない」と明言しました。いかに不条理で絶望的な環境にあっても、自らが灯明となって光を投げかけ、環境を救わんとする主体性にこそ人間の尊厳があることを、多くの被災された人達やボランティアの皆さんが身をもって示されておられます。その背中から《私達の心は、いつも、あなた達とともにあります》とのメッセージが伝わってくるようです。お釈迦様が仰るように、一人一人が自らを灯明として自覚し、その自立した人間同士の間帯により、今このリアルな課題に取り組み、それぞれの環境を救い、よりよくしていくこうとする途上にある限り、いつでも私達の心は被災地で困難に耐えながら頑張っている人達とともにあるのだと思います。

『法華経』を弘められた伝教大師(でんぎようだいし)・最澄(さいちよう)聖人が「一隅(いちぐう)を照らす、これすなわ

ち国宝なり」と仰ったように、自分自身が灯明であると自覚して生きる人は皆素晴らしい「国宝」と言えるのです。まずは、こういう自覚を持つことが大切なのだと思います。

「天津波、台風、火山の噴火、地震、大洪水など、絶えず何か大災害にさらされた日本は、地球上の他のどの地域よりも危険な国であり、常に警戒を怠ることの出来ない国である」と。これは大正時代に駐日大使をつとめたフランス詩人ポール・クロードル氏の言葉です。さらに彼は「大地は堅固(けんこ)さというものを全く持ち合わせていない」と喝破された。

仏教詩人と呼ばれる坂村真民(さかむらしんみん)氏に《大地震がきたら》という詩があります。「(略)不幸なことなど・全く起こりそうなどありませんが、あなたがいる処は地震地帯・ほんといつどかんと・大地震がくるかも知れませんが・妻を思い子を思う・あなたの熱い心を思いながら・ありがとうございますと・感謝しました・どうかそんな日がこないよう・祈ってやみません(『坂村真民全詩集第4巻』)」という詩である。また《私の詩》という詩があります。「わたしの詩は・生きるために苦しみ・生きるために悩み・生きるために泣き・生きるために・さげすまれ・はげかしめられて

も・なお生きようとする・そういう人たちにささげ・そういう人たちに読んでもらう・わたしの願いの・わたしの祈りの・かたまりであり・湧き水である

(『坂村真民全詩集第3巻』と、
謳われた真民氏の詩は、苦しみ悲しみを抱えて生きる人たちに大きな力を与えてくれます。

東日本大震災の被災地の写真を撮り続けているというある写真家は、被災地に言い続けて、被災地の空を撮り続けられたのです。地上は、見るも無惨なことは周知の通り。しかしそんな時にも空は、どうだったのか？ そうだ、「自然は変わらないのだ」と。天を仰ぎ、安らかな気持ちにさせてもらったのだそうです。また、漢方医で、多くの人の臨終を看取ってきた方がいらっしやる。彼は、人が死に直面してどのような心の変化が起こるかを語っていたので、以下に紹介します。「まず、男女の欲望が消えてしまう。男女という概念も薄れていくそうです。更に、お金や財産などに対する執着が消えてゆき、名譽などへのとらわれも無くなってゆく。そこで、身内に対する思いがわき起るといいます。家族に会いたいという思いです。それを抜けると、最後には、吹いてくる風や日の光など大自然に対する思いが残るのだ」と。そして最後に

「大いなる大自然の、吹く風や射し込む光に触れると、人はこの大いなる命に帰って行くのだという安らかな気持ちになれるようです」と。この心境をどうお感じになられますか？ 私達は大自然の一部であることを改めて考えさせられるメッセージだと思います。

最後に紹介させて頂くのは、その生涯を法華経の信仰と、農民生活に根差した創作を行った詩人であり、童話作家の宮澤賢治(明治二十九年〜昭和八年)です。賢治は、急性肺炎のため三十七歳の若さで、その生涯を終えられました。病の床にあつて『疾中より』という詩を残されています。床に伏せて血を吐き、苦しんでいる様子を詠いながら、最後にはこう結んでいます。「あなたの方からみたらずあぶんさんたんたるけしきでせうが、わたくしから見えるのは、やっぱりきれいな青ぞらと、すきとほつた風ばかりです」と。病床を外から眺めていると、悲惨なばかりであろうが、その病床から見れば、青空と風ばかりだ、と。ハッとさせられる詩です。どん底を外から眺める景色と、どん底から見える景色とは全く違つてでしょう。そして、このどん底の景色を見てこそ、真の慈悲の心が生まれてくるのだと思います。

● 神に愛された富山

地震速報でよく耳にする県は、福島、

宮城、熊本、長野、新潟、静岡あたりが地震が多い印象の県です。また、小さい地震が一番起っている県は、茨城だそうです。逆に地震が少ない県は、我等が「富山県」だそうです。富山県は統計的に見ても地震が少ないのです。

気象庁の資料によると、昭和六十一年〜平成二十八年の約三十年の間、富山県の地震の回数は、震度三以上が二十七回、震度四以上が五回と全国で最小です。台風も多い九州ですが、地震に関しては「佐賀」も少なく、富山と佐賀で一位二位を争う状態です。

新潟や長野で大地震が発生した時でも、富山県を囲む「北アルプス立山連峰」が地震の波を吸収し、揺れが小さくなるそうです。山に囲まれていることから、地盤が硬いことも理由の一つだそうです。

過去の富山の地震史を調べると、一五八六年の天正地震(M7.8)や、一八五八年の飛越地震(M7.1)。

この二つの地震では、富山県も大きな被害に遭いました。富山県人は皆おっしやいます「立山連峰に守られているんだ。あれは神の山だよ」と。全く同感です。とは言え、いつ何時、自然災害が発生するかも知れません。大自然は、時には恐ろしい猛威を振るい、我々人間を、容赦なく苦しめることもあります。しかし私達を生かしてくれているのも、またこの大自然に他なり

ません。私達は大自然を目の前にして、ただただ謙虚に、そして感謝して、いま在るこの命を大切に生かしてまいりましょう。

合掌 副住職 谷川寛敬



来月の
ご案内

来月はお会式がござります

いとこ煮を作つて皆様をお待ちいたしております

十一月二日(日)

午後一時から

お問い合わせの上お参り下さい

